プッツン

今野尚子

一年ほど前のことになるが、プッツンということばがはやった。このはやりことばとしてのプッツンの意味を、教室で学生に問うてみた（調査は一九八六年十一月）。答えとしては

。急激に常識をなくす
。普通ではない人
。ピントがあわない人、話

などがあがった。これらははやりことばとしてのプッツンを正しくとらえていると考えられるが、中に

。怒ったときに使う

という答えがあった。勘忍袋の緒が切れる状態をプッツンで象徴的にあらわしたものでなかなかユニークだと思うが、はやりことばとしてのプッツンとは少しずれる。

この、プッツンのように音に仮託して動作や状態を象徴的にあらわすことばを擬態語（呼び方はいろいろあるが、ここではこう呼んでおく）という。擬態語は感覚的によくわかる、ということもあるが逆に感覚的であるために理解できる人々が限られるということもある。また、さきほどのべたような理解のずれを生むこともある。しかしプッツンの場合には一方に一般的なプッツン——張っている糸状のものが急に切れたような状態をあらわすことば——が存在しているので、理解のずれはそれほど大きくならないであろう。ところが擬態語の中には時代とともに使われなくなってしまうものもあるし、新しく生まれてくるものもある。ここでは江戸時代の文献にみられる擬態語の中から現在あまり使わないものをふたつとりあげてみたい。

1　キカト

〔表〕アラハストヨムアラハル、ニ非ス（中略）旌ハ人ノ善悪ヲアラハスニ限ル表ハ何ニテモキカト取出シテ人ニ知ラスルコトナリ（訳筌初編巻二24ウ1）

キカトに最も近い現代語は「きっかりと」であろう。「しかと」→「しっかりと」、「ふつと」→「ふっつりと」など語形の対応はすぐに思いあたるであろう。「きっかりと」は現在もっぱら「きっかり」という形で「ちょうど」とか「ぴったり」という意味に使われる。また「はっきり」・「くっきり」といった意味もあることは次の例からも知られる。

お品が表の大戸を開けさせた時は日がきらきらと東隣の森越しに庭へ射し掛

けてきっかりと日蔭を限って……
（『土』長塚節）

ところでキカトのほうであるがさきにあげたのは荻生徂徠の『訳筌初編』の中、「表」字の解説にみえる例である。意味は「きっかりと」で述べた後者の「はっきり」・「くっきり」と同じであろう。キカトは抄物によく使われ、江戸時代の漢学との関係には興味深いものがある。

其患ノ分明ニキカト明ト明ニシテ別ノ事ガナイソ（毛詩抄巻二3ウ1）

病応ト云モノハキカト表ニアラハレテ見ヘタモノソ（史記抄巻十三9オ10）

いずれの例でもキカトのあらわす状態は現代ならば「はっきり」・「くっきり」にあたるであろう。もちろん江戸時代にも「はっきりと」という擬態語は存在するが勢力を持つのは後期になってからのようである。本居宣長の『古今集遠鏡』にはキカトはみられずハッキリトが七例みられる。

○秋ガキタトイフテ　ソレトハツキリト目ニハ見エヌケレド　ケフハ風ノ音ガニハカニ　カハツタデサ　コレハ秋ガキタワト　ビツクリシタ（古今集遠鏡巻二8ウ5）

2　ウロリト

Vrorito 副詞・人があっけに取られて茫然としているさま（『邦訳日葡辞書』）

『日仏辞書』でも Ourorito の註に「Manière d'être étonné et comme hors de soi-même.」とあり、註の前半には「びっくりする」という意味が含まれているようである。註の前半をとれば「うろたえる」、後半をとれば「うっとりする」という表現が現代語でいえば近いであろうか。「ころころ」→「ころりと」、「さらさら」→「さらりと」などの対応を考えれば「うろうろ」（あるいは「おろおろ」か）→「うろりと」という対応も成り立ちうる。

ところでさきほどの『訳筌初編』にウロリト一例を見出した。

〔敬〕ウヤマフト訓シツヽシムト訓ス心ヲウロリトセヌ処ヲ主トセル字ナリ書柬等ソノ外軽ク使フタルハ多クハウヤマフ意ナリ（訳筌初編巻六29オ1）

「敬」字についての解説で、「敬」は心がウロリトしていない状態に主眼をおいた「ウヤマフ」であり「ツヽシム」だというのである。『訳筌初編』の〔怠・慢・弛〕の解説にはつぎのようにある。

トモニオコタルト訓ス敬ノ反対ナリ気ノハリノナキナリ（巻六28ウ4）

「敬」字の反対であることを共通項として、

「心ヲウロリトする＝気ノハリがない」

という等式が成り立つ。するとウロリトは「気ノハリノ」ない、「怠・慢・弛」であらわされるような状態をさすことになる。だらだらしたところのない態度で接するのが「敬」の「ウヤマフ」であるということだろう。『訳筌初編』のウロリトには「あっけにとられる」とか「びっくりする」といった意味は含まれないようである。

以上、わずか二語ではあるが近世の擬態語について考えてみた。現代の感覚にてらしてみていかがであろうか。

〔附記〕本稿は拙稿「人情に近きもの――『訳筌初編』の擬声語――」（『国文学研究』第九十四集掲載予定）を補うものである。『訳筌初編』等についての詳細はそちらを参照されたい。本文中の抄物は「抄物資料集成」（清文堂）による。『日仏辞書』は再版による。